

差点

カフェに併設しているギャラリーの一角に「生誕百年 田淵行男と臼井吉見をしのんで」というコーナーを設けました。

田淵さんは亡き父が最も尊敬した山岳写真家であり、高山チョウ研究者であり、何よりもナチュラリストでした。

山と写真が好きだった父は、晩年の田淵さんと山で出会っ

たとき、体が不

自由になった田

淵さんのカメラ

のシャッターを

押したと言って

おりました。

わが家の台所

には「1988

年 自然への讃

歌(さんか)田

淵行男展」のカタクリに止まるヒメギフチョウのポスターが今でも張られたままです。

父は田淵さんのサイン本を終生宝にして、これらも私の仕事部屋の書架に昔そのままに並び、持ち主亡き後もわが家の移ろいを見つめ続けてきま

した。

一方、臼井吉見さんは大河

小説『安曇野』の著者で知ら

れる偉大な方ですが、かつて

の松本女子師範学校で母の恩

師でした。万葉集などの授業

のほか、臼井先生の文学同好

会で在職三年の間、その薫陶

を受けました。先生が退職し

て上京する昭和十八年三月、松本を離れる前の晩に書いてくださったという自作短歌の

色紙と、二十年後の冬、波田村(当時)で師弟再会の喜びを、漢詩から引用して書いた色紙をギャラリーに展示しました。父愛読の『安曇野』初

版全五巻と田淵さんの写真集

も置きました。くしくもお二

人は同年六月のお生まれだっ

たのです。

展示のために、長くわが家

に眠っていたガラスケースの

ほこりを払い、本を納めると

き、「ああ、父へのレクイエ

ム」と直感したのです。翌

生誕百年のお二人

日、カフェの勝手口を出ると、明るい春の日差しの中、何と田淵さんが愛されたヒメギフチョウが止まっていたのです。ここまでよくぞ飛んで来てくれたと感動しました。波田のカタクリ群生地の花ももうすぐです。

この小さなギャラリーの一隅で、万感の思いを込めてお二人の偉業をしのいでいます。三月には市民タイムス編

『臼井吉見の「安曇野」を歩

く(上)』が出版されました

が、その本に導かれながら母

の師を仰ぎ、父のぬくもりこ

もる『安曇野』全五巻をいつ

の日か読了しようと心に決め

た春です。(波田町、古畑博子、55歳)